

勤王僧神阿和尚の傳

石 橋 誠 道

徳川時代は我が宗の最も幸福な時代であつたと言つてもよからう。少からざる幕府の保護と、それに伴ふ民衆の歸仰とは、我が宗門を増々進展に向はしめ、僧侶を恰かも佛の如くに尊敬せしむるに至つたのである。然しながらその間には、また幾多の暗雲が漂ふた。その暗翳を拂ひ去り、教界の革新を計らんとして、潑刺たる元氣と、確乎たる決心を以て、振ひ起つた名士の中に、捨世派律院の人々がある。その最後の幕を飾つた、有名な人の一人は、即ち徳本上人である。徳本上人の弟子の中に、現にその名の解つておる者だけでも、男僧が二百八十名、尼僧が二百三十名である。(三河荒井山九品院の記録に依る)その多かつた門弟の中、三河の國荒井山九品院の徳住上人は、最も勝れた人であるが、この人の生家は私の出生地并に私の師籍である三河の真照寺は僅かに十五六町の距離にあり、今述べんとする神阿和尚とは、伯父と甥との間柄で、自然兩師の傳記の中に、少からざる關係があるから、先づ初に徳住上人を傳して後に、神阿上人に移りたいと思ふ。

徳住上人は、三河國碧海郡大濱町角谷大十の家に生誕された。この大濱町は、東海道刈谷の驛から、南の方へ三里餘り、西には三河灣の一部分、衣が浦を遙かに隔て、尾張知多郡の半田港武豊港に相對し、東は一帯の平原で、田畑村落等が點在し、其の中央には矢矧川が、北から南に流れてゐる。この川の水は極めて淺く、白砂堆高き洲を作り、流れ

も至つてゆるやかであるから、余の少年の時代には、楽しい夏が来る度に、多くの友達とこの川に遊び、嬉しい時を過したことが、今更懐かしく思ひ出さるゝ。而して南は三河灣を隔て、濕美半島や知多半島が、遙か向うに相ひ擁しておる。その間には二三の島がほんやりこして見へておる。昔はこの町は漁村であつたが、今は農業機業等が盛んで、漸次發展して二千戸餘りの靜かな平和な田舎町である。然しながら徳川家康公の祖先である親季及び有親公の墓のある稱名寺、并に眞宗の有名な清澤滿之氏の住職地西方寺はこの町にある。

この町の中央に位する、入江の橋のたもこの所に、一軒の綺麗な店がある。表の看板には「からし漬」を書いてある。これが即ち三河の名物「茄子のからし漬」の老家であり、このからし漬は、時々宮内省にも御用があるを聞いておる。この老家こそ其昔し徳住上人と神阿和尚が、呱呱の聲を挙げられた家であり、今尚ほ相當の物持で、最も社會の信用ある家である。

徳住上人は安永六年、四人の兄弟の一人としてこの家に生れ、九歳の時尾張國知多郡阿久比村椋岡の雲谷寺の住職眞譽上人に従つて剃髮し、十五の時東都に上り、縁山に於て學を修め、兩脉を相承し、三十餘歳の頃、中山道本庄の宿圓信寺に住職されたが、その後小石川の傳通院で、徳本上人の教化を受けて、忽ち生活を一變し、かの圓信寺を捨て小石川の一行院に入り、徳本上人の弟子となり、その名を徳住と賜はつた。その後は一心に修行して、一食長齋、晝夜不臥、日課念佛十萬遍といふ、荒い修行を實行された。

徳本上人の滅後には、三河に來つて岩屋の瀧、黒瀧の瀧等で身を清め、晝夜不臥にして念佛し、文政十一年十一月には、進んで具足戒を受け、法隆寺の叡辨和尚の證明を得た。而して信州唐澤山では、一千日の別時念佛を修し、其後漸く教化に趣き、信濃、甲斐、駿河、相摸等を巡化して後三河に歸り、尾張に至つて城主を教化し、大樹寺隨譽上人の好

意に依つて、一寺を建て、荒井山九品院と名け、暫くこの寺に居られたが、更らに進んで伊勢の山田の總通寺、齋宮の蓮光寺等を再興し、又大阪の高津の源正寺、名古屋の光照院等の中興して捨世の道場と定められた。其後大和、河内、紀伊、丹波、丹後等の教化を終へて京都に來り、粟田の宮の厚意に依て、定信院に留錫し、日々公請に趣いて、淨土の宗義を講ぜられ、黃門亞相も冠纓を傾け、貴顯紳士も念珠を手にして、念珠を勵まれたと傳へられてある。

然るに天保十三年の夏、やゝ疲勞の様子あり、名古屋の光照院で靜養されたが、藥石其功を奏せずして、遂に八月二十三日の朝、剃髮沐浴し新衣を着し、頭北面西して命終された。時に六十六歳であつた。

神阿和尚は隆音といひ、徳住上人の甥である。文化十四年角谷家に生れ、幼年の時伯父徳住上人に従つて出家して九品院に居られたが、天性頗る學問を好み、常に讀書に耽られた。されば徳住上人の一向專修の風格とは、やゝその趣を異にした。元來徳住上人は、念佛の一行を勵まれたので、多くの弟子に讀書を禁じ、唯だ念佛を勵められた。然るに神阿和尚は之れを反對であるので、常にその辭を誡められた。然し一徹の神阿和尚は、なかなかそれを聽かなかつた。ある時徳住上人が、後夜の勤行を勤む可く、本堂に上らんと言はれた際に、切りに線香の香がするので、その原因を探らんとて、幾多の室を明けられた時、神阿が未だ眠らずして、線香を吹きつゝ明りを取つて、讀書するのを發見し大に其志に感じて、遂にこの人だけは特別に讀書を許されたといふことである。

曾て徳住上人が、粟田の定信院に居られた頃、神阿和尚も隨侍せられ、勤息上人の師匠である雷雨律師も同居せられたが、兩人何れも侃々諤々、一步も譲らない性質であるので、世態を論じ法義を談じて、激論が常に絶へなかつた。傳へられてある。神阿和尚の性格は、頗る豪放の質であつた。如何なる人に對しても、自分の信じた事なれば、徹底的に押し通して、一步も譲らない性質であつた。曾て中將烏尾得庵と議論して、口角泡を飛ばし、龍虎相撃つ勢で、中々治

らなかつたが、和尙は遂に立腹して、中將の面前でお尻を捲り、「ナニクソ汝はこのけつを喰へ」とて、大きなお尻を差し出されたので、それには中將も聊か閉口し、「イヤ、ドウモ、これは豪傑（尻）だナア」と叫ばれたと聞いておる。學問に對しても之と同じく、如何なる障害も突破して、意志を貫徹するといふ決心であつた。曾て洛南菱川の西向寺に居られた時、修學の爲めに叡山に往復し、毎朝二時に起床して叡山に登つて講義を聽き、午後の五時頃寺に歸り、連日更らに倦むことなく、凡そ二年間それを繼續されたさうである。この話から考へても、如何に究學に熱心であるかを、容易に想像することが出来る。

斯くて徳往上人が、既に命終されて後は、三河の九品院を相續し、その第三世なられたが、適ま大樹寺の裏山の利權問題に端を發して、岡崎の城主本多氏と抗争し、遂には之を官に訴へ、神阿和尚の勝訴となつたが、却つてそれが爲に迫害を受け、九品院に居ることが出来なくなり、止むなく二十九歳の時、荒井山を遁れて阿波國壁ヶ嶽の徳圓寺に移り、徳往上人の法弟徳圓上人に依止された。その後數年を経て徳圓上人が示寂されたから、神阿和尚は九品院から、願成上人を（此人は後に京都寺町の聖光寺に來つて神阿の後を繼承された）呼び寄せて、共に念佛修行をされた。（但しこの徳圓寺は極めて貧寺で、衣食も乏しい有様であつたから、其村の藤右衛門といふ信者が、毎日食事を供養したといふ）その後神阿は阿波を去り、大阪濱の源光寺、同高津の源正寺、宗全寺、及び洛南の西向寺等に歴住し、又八幡の正法寺、粟田の定信院にも滞留された。その後京都寺町の聖光寺の門譽上人の後を承けて其寺に住職し、須彌説を深く研究してその蘊奥に達し、當時最も流行した、地球の説を難破された。即ち座敷の中央に、須彌山の模型を安置して、日月星宿の運行を示し、一目瞭然たらしむるに、種々の説明書を備へ、普通一般の人々にも、容易に了解し易からしめた。（但しこの須彌山の模型は、昔は普門律師の所有であり、洛西片木原の光圓寺に傳はつたもので、大阪造幣局長大野某が、非常に苦心して修繕されたから、極め

ハ完全に造られてあつたが、神阿和尚が示寂の後、光圓寺から返濟を迫まれて之を返却された、所が惜いかな今は全く失はれて、それを見ることの出来ないのは、甚だ遺憾に堪へない譯だ。又時々斯學の大家、佐田介石等を招聘して大にその學を研究された。故に佛蘭西の天文學者、エミール氏は特に和尚を訪問して、須彌說地球說等に就て、互に意見を交換し、その後國に歸つてから、佛蘭西製の混天儀一具を遙かに寄贈された。それは今尚ほ聖光寺に保存されてある。

かつ又梵曆學校を、寺の門前に建設して、大に斯學を盛んにすべく、既に準備も整ふて、巨石木材等の多くが集められ、明治十六年の五月十四日、正しく着手すべく計畫されてあつたのに、不幸にしてその月の十一日、和尚は知恩院の講演を終へて、寺に歸らるゝや不快を感じ、それが遂に腦溢血になつて再び起たず、同じく十四日に命終された。斯様に着手の日に方つて、正しく命終されたことは、これも不思議の因縁である。時に六十七歳であつた。

神阿和尚は、生前知恩院の養鷗徹定上人、書伯富岡鐵齋翁ミ意氣投合し、永く親交を續けられた。されば勤王の志深く、慷慨の情頗る盛んに、而かも戒律堅固であつた。故に神儒佛の三道を以て、益々王道を昌んにし、佛敎を興隆せんミ努力された。そは其の著述の全政王道論一卷、和氣護王大神記一卷、并に維持國體述懐、國政補佐之歎願等の文に明かに顯はれておる。今この全政王道論は、水戸公の破佛の時、萬譽顯道僧正の命に依て、神阿和尚が書かれたものである。曾て徹定上人は、一詩を贈つて讚して曰く、

天旋地動說縱橫 日沒西山海面平

畢竟世人心不靜 却疑天竺故先生

この詩は今寺町の聖光寺に珍藏されてある。而して和尚は常に諸國を遊歴して、その主義主張を宣傳し、佛敎を興し王道を助け、維新回天の事業をして、増々光輝あらしめんミ、精勵盡瘁せられたことは、我が宗門の誇りである。尚ほ

聖光寺には神阿和尚が三十歳の時血書された般若心經、神阿和尚所有の地球諸圖、及び神阿の肖像等がある。(以上は主として聖光寺の現住河勝良英氏の實話、荒井山九品院所藏の徳本上人傳記、並に徳住上人行業和讃等に依り、更らに余が曾て古老から聞き傳へた逸話等に原く)